



茨城の天然アユを考える会議

# 「茨城の天然アユを育もう」開催される

主催／茨城県内水面水産試験場、茨城県内水面漁業協同組合連合会  
後援／久慈川漁協、那珂川漁協、桜川漁協、大北川漁協、  
十王川漁協、鬼怒小貝漁協、日本友約同好会日立支部

9月30日、茨城県常陸大宮市文化センターにて茨城の天然アユを考える会議「茨城の天然アユを育もう」が開催された。平成17年の茨城県内のアユ漁獲量は802トンで全国1位。茨城県にとってアユがどれだけ大切な魚であるか、また天然アユの生産量を今後も維持するにはどうすべきかを考えるために、茨城県内水面水産試験場が音頭をとり、同県内水面漁連との共催になった。

講演の第1部では内水面水産試験場の熱血技師、荒山和則さんが「茨城の天然アユ研究の今」というテーマで、県内河川における天然アユの生態について語った。例年、那珂川や久慈川などでは、天然アユのソ上は3月上旬に始まり、4月下旬〜5月中旬にピークを迎える。早くソ上する群れには大型が多く、耳石からそれらは9〜10月の早生まれであるということが分かったという。しかし、近年、この早生まれのアユのソ上数が減っており、現在、その原因と対策について研究を重ねているという。

荒山さんに引き続き、日本友約同好会日立支部事務局長の角田恒日さんが、釣り人を代表して「つり人から見た茨城のアユ」を講演。かつては解禁初期に大型のアユが釣れたが、近年は小型しか釣れなくなると、荒山さんのレポートと内容が重なる部分もあり、来場者の興味をそそいだ。

講演の第2部は農学博士であり、たかはし河川生物調査事務所主宰の高橋勇夫さんが「アユを育

てる川仕事」というテーマで話し始めた。高橋さんはアユの研究者として広く知られ、当日は高知県から駆けつけた。

高橋さんによると天然アユは1991年以降日本全体で減っている、中でもかつては日本一の生産量を誇っていた高知県での減少が著しい。高知県では1975年のピーク時に2500トン近くあった漁獲が、現在では500トン以下にまで落ち込んでしまっている。原因についてはダムなどによる河川環境の荒廃、冷水病、海水温の上昇などいくつか考えられるが、アユそのものの主産地が西日本から東日本に移りつつあるという興味深いデータを紹介。

いずれにせよ、アユの生産量が全国で減少しているのは明白であり、それに対して私たちは今後、なにをすべきなのか。これまでアユの増殖はそのほとんどを放流に頼ってきたが、放流によりアユの漁獲が増えるという科学的根拠はなく、これからは放流ではなく天然アユを取り戻すことにエネルギーを使うべきだと高橋さんは強調した。

会場を訪れた参加者の多くは漁協関係者で、高橋さんの講演に身を乗り出すように聞き入っていた。こうしたシンポジウムを県の内水面水産試験場が企画するというのに、大きな意義があるのではないだろうか。

※P75にて高橋さんのレポート「来年の天然アユソ上予報は可能か？」を掲載しています。

## これからは放流に頼らず 天然アユを取り戻す努力をしよう

編集部レポート  
Reported by Tsuribito



- A 講演に引き続き、質疑応答が行なわれた。参加者は積極的に高橋さんや荒山さんに意見をぶつけた
- B 高知県から駆けつけた高橋勇夫さん。自ら潜ってアユの生態を調査する。さまざまなデータを参考にし、天然アユに今、何が起きているのかを調べている
- C 高橋さんの講演を身を乗り出して聞き入る来場者
- D 漁法の発達と遊漁者の増大により増加傾向にあったアユの漁獲量は、1991年をピークに減少の一途を辿っている（高橋勇夫さんのスライドより）
- E ピーク時の5分の1以下になってしまった高知県のアユ生産量（高橋勇夫さんのスライドより）
- F 秋から冬にかけてアユの仔魚が海に下った際、海水温が20℃以上あるとアユは死にやすいというデータ（高橋勇夫さんのスライドより）
- G アユの主産地が西日本から東日本に移りつつあるというデータ。青線が西日本で赤線が東日本（高橋勇夫さんのスライドより）

